

『十六・七世紀イエズス会日本報告集』における 軍役人数（兵力数）の記載について

白 峰 旬

【要 旨】

『十六・七世紀イエズス会日本報告集』は、イエズス会宣教師が日本における布教活動に関して、その成果を報告したものであるが、『十六・七世紀イエズス会日本報告集』には布教活動とは直接関係のない諸大名の軍役人数（兵力数）の記載について具体的な数字が出てくる箇所がある。これまでの研究史では、このような視点から『十六・七世紀イエズス会日本報告集』を読み解いた研究成果はなかったため、その事例を『十六・七世紀イエズス会日本報告集』から掲出して若干の考察を加えることとする。

【キーワード】

イエズス会、軍役人数、兵力数、諸大名、石高

はじめに

『十六・七世紀イエズス会日本報告集』では、諸大名関係の記載において、軍役人数（兵力数）の記載について具体的な数字が出てくる箇所がある。また、諸大名関係の石高（或いは俵高）の記載について具体的な数字が出てくる箇所もある。イエズス会宣教師が布教活動とは直接関係のないこうした点について、どのような理由で関心を持ったのかについては不詳であるが、これまでの研究史において、このような視点から『十六・七世紀イエズス会日本報告集』を読み解いた研究成果はなかったため、その事例を『十六・七世紀イエズス会日本報告集』から掲出して若干の考察を加えたい⁽¹⁾。

軍役人数（兵力数）の記載について

『十六・七世紀イエズス会日本報告集』において、諸大名関係の軍役人数（兵力数）、及び、石高（或いは俵高）の記載について具体的な数字を掲出し、まとめたものが表1である。

表1を時代的に大きく区分すると、織田信長の時代（天正9年〔1581〕）、信長の死去後～豊臣秀吉が関白になるまでの時代（天正11〔1583〕～同12年〔1584〕）、秀吉の関白就任以後～秀吉死去までの時代（天正13〔1585〕～慶長元年〔1596〕）、秀吉の死去後～関ヶ原の戦いまでの時代（慶長4〔1599〕～同5年〔1600〕）、徳川秀忠の時代（慶長18〔1613〕～元和4年〔1618〕）という

ように区分できる。

こうした点を念頭に置いたうえで、さらに細かく区分して、表1の記載内容をもとに軍役人数(兵力数)関係の記載について検討したい。

【織田信長の時代(天正9年)】

織田信長の時代は太閤検地により石高制が確立する以前の時代であるから、記載された人数は石高制に基づく軍役人数ではなく、単に動員した人数(兵力数)を指すと考えられる。表1では天正9年の事例が出てくるのみであるが、信長や柴田勝家のほかに、武田信玄(引用者注:武田勝頼が正しい)の兵力数が出ている点は注意される。

【豊臣秀吉の関白就任以後～朝鮮出兵より前の時代(天正13～同18年)】

天正13年の秀吉による雑賀攻めにおける、宇喜多秀家(先陣)の兵力数を2万、蒲生氏郷(先陣の次)の兵力数を5000としている(Ⅲ-7、88頁)。宇喜多秀家の石高は57万4000石なので⁽²⁾、1万石につき300人を軍役基準とすると(この場合、計算上、無役高は考慮しない)、1万7220人になるので、上記の2万という数値に近似する。

蒲生氏郷については、上記では兵力数を5000とするが(Ⅲ-7、88頁)、他の記載箇所(雑賀攻めの関係記載ではない)では、伊勢に米25万俵以上の収入があり、戦時には6000余の兵を率いる、としている(Ⅲ-7、99頁)。俵と石高の関係については、米2俵=1石という計算値なので(Ⅰ-3、238頁)、蒲生氏郷の米25万俵以上は、石高にすると12万5000石以上ということになる。蒲生氏郷の石高は12万石なので⁽³⁾、数値としては近似する。1万石につき300人を軍役基準とすると(この場合、計算上、無役高は考慮しない)、12万5000石では3750人になるので、上記の5000、或いは、6000余という兵力数とは開きがある。軍役基準を変えて、1万石につき400人を軍役基準とすると(この場合、計算上、無役高は考慮しない)、5000人、1万石につき500人を軍役基準とすると(この場合、計算上、無役高は考慮しない)、6250人になる。よって、上記の雑賀攻めの際の蒲生氏郷の兵力数5000は、1万石につき400人の軍役基準であったことになる。そして、上記の蒲生氏郷の兵力数6000余は、通常の軍役基準では1万石につき500人を軍役基準としていたことを示すものであろう。

天正12年の沖田畷の戦いでの龍造寺隆信の兵力数を2万5000としている(Ⅲ-7、112頁)。この場合、どのような軍役基準で動員したのか不明であるが、沖田畷の戦いにおける龍造寺隆信の兵力数が2万5000と明示されている点は貴重である。ちなみに、沖田畷の戦いで龍造寺隆信は戦死している。

高山右近に関しては、天正17年(1589)の時点で「ジュスト右近殿は父ダリオともども、最初の領国を追われ、現在加賀領(引用者注:前田利家の領国)に身を落ちつけている。関白殿(引用者注:秀吉)から彼は二万俵の禄を、父は六千俵をそれぞれもらい受けているが、たとえ戦役が起こっても、暴君(引用者注:秀吉)に仕える義務はない。」(下線引用者)、(Ⅰ-1、119頁)、天正18年(1590)の時点で「加賀の国主(引用者注:前田利家)のもとで恩恵を受けるように取り計らわれた。関白殿(引用者注:秀吉)の〔と人々が信じているように〕命令で、年四万俵の封禄が彼に与えられ、しかも何一つ責務(引用者注:戦時における軍役を意味する)を負っていないのである。(中略)たしかに彼は以前所有していた城も兵士も今は持っていないが(後略)」(下線引用者)、(Ⅰ-1、181～182頁)という記載がある。

高山右近は天正15年(1587)のパテレン追放令の発令の際に秀吉によって改易されたため、天正17年、同18年の時点では、加賀金沢城主前田利家のもとに身を寄せていた。このように高山右近は改易されて「城も兵士も今は持っていない」(Ⅰ-1、182頁)状態だったので、戦時において、秀吉に対して軍役の義務を負っていなかったことがわかる。

【朝鮮出兵（天正19年、同20年）】

秀吉の朝鮮出兵（文禄の役）に関しては「(引用者注：秀吉)は非常に信頼を厚くしていた諸侯四名を指名し〔彼らよりも有力な諸侯がいたに(引用者注：「も」脱カ)かかわらず〕彼らをして新王国(引用者注：中国大陸における新しい征服地を指すと考えられる)の主君にすることを望んだので、皆の者は大いに驚いた。その中の二名は(中略)キリシタンであった。すなわち肥後半国の領主アゴスチノ津の守(引用者注：小西行長)と、(引用者注：黒田)官兵衛殿の息子で豊後国大半の領主甲斐守(引用者注：黒田長政)であった。他の二名は異教徒で、残りの肥後半国の領主でアゴスチノ(引用者注：小西行長)の不倶戴天の敵なる虎之助(引用者注：加藤清正)と、豊後国の残りの領主でアゴスチノ(引用者注：小西行長)と甲斐守(引用者注：黒田長政)の敵なる壱岐守(引用者注：毛利吉成)であった。」(I-1、274頁)という記載がある。

この記載からは、加藤清正(肥後半国の領主)は小西行長(肥後半国の領主)の不倶戴天の敵であり、毛利吉成(豊後国の残りの領主)は小西行長(肥後半国の領主)と黒田長政(豊後国大半の領主)の敵であり、肥後国と豊後国はそれぞれ秀吉子飼いの部将により治められていたが、両国内では相互の部将が敵対する状況であったことがわかる。

秀吉はこの4人(加藤清正、小西行長、黒田長政、毛利吉成)を「新王国(引用者注：中国大陸における新しい征服地を指すと考えられる)の主君にすることを望んだ」(I-1、274頁)ということは、朝鮮出兵(文禄の役)では秀吉がこの4人の子飼いの部将を若手のホープ(天正20年〔1592〕の時点で、加藤清正は31歳、小西行長は35歳、黒田長政は25歳、毛利吉成は年齢不明)として期待するとともに、互いに牽制させて切磋琢磨させようとしたと思われる。

朝鮮出兵(文禄の役)における総兵力数は「かの四名の大將(引用者注：加藤清正、小西行長、黒田長政、毛利吉成)に率いられた將兵を除いても、総勢二十万はいた」(I-1、279頁)と記載されていることから、総勢20万人に上記の4名の部将(加藤清正、小西行長、黒田長政、毛利吉成)の兵力数をプラスしたものが総兵力数ということになる。

朝鮮出兵(文禄の役)における総兵力数について、他の記載箇所では「名簿によって判った総数は三十万で、その中の將兵は二十万であった」(I-1、275頁)と記されていて、総数30万人で、そのうち將兵は20万人としているので、10万人は將兵以外(非戦闘員)ということになる。

それ以外の記載箇所では「(引用者注：秀吉)は二十万の兵力をもってすれば、あの朝鮮国は何の苦勞もなしに占領できようと、彼らに意向を洩らした」(I-2、93頁)、「(引用者注：小西行長)は朝鮮(引用者注：での)行軍と戦役においては、二十万に近い軍勢の最高(引用者注：指揮官)で(後略)」(I-3、277頁)と記されていて、兵力20万としている。

こうした記載を考慮すると、戦闘員(將兵)の人数は4名の部将(加藤清正、小西行長、黒田長政、毛利吉成)の兵力数以外に20万人、そのほかに非戦闘員(將兵以外)は10万人であり、それらを合計した総数は概数で30万人ということになる。

朝鮮出兵(文禄の役)における個々の部将の動員人数については表1を見るとわかるが、その関係記載をさらに詳しく検討したものが表2である。

表2を見るとわかるように、すべて九州の部将に関する記載であり、兵力数A(『十六・七世紀イエズス会日本報告集』に記載された諸將の兵力数、I-1、275頁)に着目すると、最も兵力数が多いのが小西行長の1万5000人であり、最も少ないのが大村喜前の1000人である。表2を見ると、兵力数Aは諸將の石高と一定の相関関係があることがわかるが、小西行長については、小西行長より石高が多い大友義統、島津義弘、龍造寺高房よりも兵力数が多い。これは小西行長について、「関白殿(引用者注：秀吉)は、格別の恩恵によって、アゴスチノ(引用者注：小西行長)を朝鮮国への先陣とした。すなわちアゴスチノ(引用者注：小西行長)一人が、己が

軍勢を率いて朝鮮国へ侵攻するのであり、他の諸将は朝鮮から十八里隔たつた対馬に待機して、アゴスチノ（引用者注：小西行長）からの報告を待つことにした。」（下線引用者）、（I-1、275頁）と記載されているように、小西行長が先陣であったため、表2では最も多い1万5000人の兵力数を動員したと考えられる。

兵力数Aと兵力数Bを比較すると、大友義統、大村喜前、有馬晴信は兵力数が一致するが、島津義弘、黒田長政、龍造寺高房は兵力数Bの方が兵力数Aよりも多い。また、小西行長は兵力数Aの方が兵力数Bよりも多く、兵力数Aが兵力数Bの2倍以上になっている。兵力数Aと兵力数Bを比較して差異がある場合、その理由について今後検討していく必要があるが、小西行長は熱烈なキリシタン大名であり、イエズス会と密接な関係があったことを考慮すると、小西行長の兵力数Aの1万5000人というのは、一定の信憑性があったと考えることができよう。

兵力数Aの軍役基準（1万石につき何人）については、最も低い島津義弘（1万石につき129人）から最も高い小西行長（1万石につき750人）までバラツキがあるが、表2において小西行長のように兵力数Aの軍役基準が高い部将は、実際の軍役基準以上の兵力動員をしていると考えられる。つまり、兵力数Aの軍役基準は、各部将の石高と兵力数Aの関係をもとに、1万石につき何人の軍役基準であるのかを単純に計算した数値なので、表2において小西行長のように兵力数Aの軍役基準が高い部将は、実際の軍役基準はもっと低かった可能性があり、その実際の軍役基準以上を動員したケースであったと考えられる。なお、計算上、無役高を考慮していないため、無役高が個々に判明すれば、兵力数Aの軍役基準の計算結果も変わってくることになる。

【関ヶ原の戦い（慶長4年、同5年）】

慶長4年、石田三成が使者を徳川家康のところへ遣わして詰問した際に、家康は「己が諸国から三万の軍勢を召集し、これによって敵方の力に対してなした最大の兵力をもって固めた」（I-2、122頁）と記されているので、家康の領国からの最大動員兵力数が3万という点は、翌年の関ヶ原の戦いにおける家康の領国からの動員可能な兵力数を考慮するうえで重要である。

慶長4年、石田三成が失脚した際に、石田三成は「（引用者注：大坂）城から遠くない（引用者注：石田三成の大坂）邸にいて、六千の武装した軍勢に護られながら夜を過ごしていた」（I-3、123頁）と記されている。石田三成の6000という兵力数は翌年の関ヶ原の戦いにおける三成の兵力数ともほぼ一致する。

関ヶ原の戦い直前の段階（8月と思われる）における石田三成の兵力数は「治部少輔（引用者注：石田三成）が六千ないし七千の兵を率いて、尾張に攻め入ろうと、今か今かと待機していた」（I-3、250頁）、「治部少輔（引用者注：石田三成）が六、七千の軍勢を率いて、同国（引用者注：美濃国）の中に毎時大勢を待機させておいて（後略）」（I-3、307頁）と記されていて、三成の兵力数を6000～7000としている。この点は、当時の日本側の史料である石田三成の人数書き立て（慶長5年8月5日頃の時点における石田三成・毛利輝元方の諸将の配置と動員人数を記した史料）⁽⁴⁾において、石田三成の軍勢の人数を6700人としていることと近似する。石田三成の石高は19万4000石⁽⁵⁾であるので、軍役基準（1万石につき何人か）を計算すると（この場合、無役高は考慮しない）、6000人の場合は1万石につき309人、7000人の場合は1万石につき361人になる（計算上、小数点第一位を四捨五入した）。

関ヶ原の戦い直前の段階（8月頃と思われる）における毛利秀元の兵力数は「彼ら（引用者注：毛利秀元の軍勢）はそこでおよそ一万二千人くらいが城塞（引用者注：松尾山城カ）を修復し、出陣の準備をしていた」（I-3、240頁）と記されていて、およそ1万2000人くらい、としている。この点は、上述した石田三成の人数書き立て⁽⁶⁾において、毛利秀就（秀元カ）の軍勢の人数を1万人としていることと近似する。毛利秀元の石高は20万石⁽⁷⁾であるので、軍役基準

（1万石につき何人か）を計算すると（この場合、無役高は考慮しない）、1万石につき600人になる。

毛利輝元については、「その諸領主から来た兵すべて四万」（I-3、254頁）、「己が諸領国から四万の軍勢をも召集していた」（I-3、311頁）と記されていて、4万人の軍勢を自分の領国から上坂させた、としている。この点は、上述した石田三成の人数書き立て⁽⁸⁾において、毛利輝元の軍勢の人数を4万1500人としていることと近似する。毛利輝元の石高は120万5000石⁽⁹⁾であるので軍役基準（1万石につき何人か）を計算すると（この場合、無役高は考慮しない）、1万石につき331人になる（計算上、小数点第一位を四捨五入した）。

島津義弘と小西行長の兵力数については「このような状況下で、薩摩の国主（引用者注：島津義弘）とアゴスチイノ摂津守殿（引用者注：小西行長）が若干の軍勢を率いて治部少輔（引用者注：石田三成）の城（引用者注：大垣城）へ到着した」（I-3、308頁）と記されている。この場合、大垣城に入城した島津義弘と小西行長の軍勢が「若干の軍勢」であり、兵力数としてそれ程多くなかった点に注意したい。朝鮮出兵（文禄の役）では、島津義弘の兵力数は8000人、小西行長の兵力数は1万5000人であったが（I-1、275頁、本稿の表2参照）、島津義弘と小西行長が大垣城に入城した時点（8月下旬と思われる）では、上述のように「若干の軍勢」としているので、朝鮮出兵（文禄の役）の時の兵力数に比べると、かなり少なかったと考えられる。

反家康としての石田三成・毛利輝元方の総動員兵力数については、「多数の諸侯はただちに軍兵を率いて大坂の政庁（引用者注：大坂城）に集結した。その数はわずかの間に十万を超えた。」（I-3、248頁）と記されていて、反家康方の軍事動員が成功して10万を超える軍勢が大坂城に集結したことがわかる。

石田三成・毛利輝元方では「軍勢を率いて都へ帰ろうとする敵（引用者注：家康方の軍勢）の望みを奪おうとした。彼らはこの計画を実行するために、伊勢と美濃の国に己が最大の軍勢を集結させた。」（I-3、306頁）、「多くの地に分散した軍勢を擁していた奉行たち（引用者注：反家康の二大老・四奉行）は軍勢を美濃の国へ集結させる意図を少しも棄てず、それを実行した。そこで八万人が集結したが（後略）」（I-3、309頁）、「各自の軍勢を諸地方に分散させていた諸奉行（引用者注：反家康の二大老・四奉行）は、その軍勢を可能なかぎり美濃の国に集結させようとした。その結果、八万の兵を集めることができた。」（I-3、253頁）と記されている。よって、家康方の軍勢の西上を阻止するため、石田三成・毛利輝元方では伊勢・美濃方面に兵力を集中させ、その兵力数を8万人としている。ただし、兵力数を8万人とする点については過大な数値である可能性があり、今後検討する必要がある。

一方、伏見城に残された家康方の兵力数は2000人であり（I-3、242頁）、清須城に集結した家康方の兵力数は「尾張の城（引用者注：清須城）には約三万の兵が集結した」（I-3、250頁）、「その城（引用者注：清須城）へ集められた三万の軍勢」（I-3、307頁）と記されていて3万人としている。この清須城の兵力数の3万人というのは家康自身の軍勢が合流する前の段階の兵力数であり、「内府様（引用者注：家康）が尾張に到着したその日、彼はいささかの遅滞もなく、味方の軍勢と合流しておよそ五万の軍団を結成し（後略）」（I-3、253頁）、「内府様（引用者注：家康）は時間が無駄に過ぎぬよう、尾張へ到着したその日に、美濃（引用者注：尾張カ）にいた軍勢と合流し、そのうえ五万の軍勢を擁するようにした」（I-3、310頁）と記されていて、家康自身の軍勢が合流して5万人になった、としているので、家康が江戸から引き連れてきた軍勢は2万人ということになる。

【石垣原合戦】

家康方の黒田如水と反家康方である石田三成・毛利輝元方の大友義統が戦った石垣原合戦

(豊後)については、黒田如水の兵力数を8000人、大友義統の兵力数を4000人としている（I-3、251～252、308頁）。

『十六・七世紀イエズス会日本報告集』では、黒田如水は「日本の慣例に従って領国を息子甲斐守殿（引用者注：黒田長政）に譲った後も、（中略）（引用者注：長政の）不在中は領国を治めていた」（I-3、209頁）のであり、「豊前の国に八千の軍勢を有したので（中略）その軍勢を内府様（引用者注：家康）の敵たちがいた豊後の国の方へ率いて行った」（I-3、308頁）と記載されている。つまり、黒田如水は長政に領国を譲ったあとも、長政の不在時には、依然として豊前の「国主」（I-3、308頁）であり、如水が出陣した際の8000の兵力は黒田家の家臣であったことになる。よって、黒田如水が金銀で急遽募兵したという『黒田家譜』の有名な話⁽¹⁰⁾は虚偽であることがわかる。

石垣原合戦で黒田如水と対戦した大友義統の動向については「奉行たち（引用者注：反家康の二大老・四奉行）は同じ豊後の国へ、かつての豊後の国主フランシスコ（引用者注：大友宗麟）の息子（引用者注：大友義統）〔彼は二、三年の間、太閤様の命令によって都に引き留められていた〕を遣わし、その領国の正統の国主として、その家来たちとともにいっそう容易に官兵衛殿（引用者注：黒田如水）の攻撃を撃退させようとした。この新しい豊後の国主（引用者注：大友義統）は、四千の軍勢を率いて豊後へ到着するやいなや官兵衛殿（引用者注：黒田如水）の侵攻を知らされ、引き続いて合戦（引用者注：石垣原合戦）となった。」（下線引用者）、（I-3、308～309頁）と記載されている。

この記載からは、大友義統は「奉行たち」すなわち豊臣公儀から豊後国に遣わされた「正統の国主」であり「新しい豊後の国主」であったことがわかる。よって、大友義統は正式に豊臣公儀から「新しい豊後の国主」に任じられたということになり、その意味では、大友義統が旧領を回復するために豊後国へ来て挙兵したとする通説の説明は誤りであることがわかる。また、通説では、豊後国へ下った大友義統は、急遽、旧家臣を集めて挙兵した、と説明されることが多いが、上記のように「四千の軍勢を率いて豊後へ到着するやいなや」と記されているので、大友義統はすでに豊後国へ来た時点で4000の軍勢を率いていたことがわかる。この4000の軍勢は、豊臣公儀から豊後下国に際して大友義統に付けられた軍勢であると思われる。

以上のように、諸大名の具体的な軍役人数（兵力数）について、日本側の史料以外からわかるのは貴重であり、今後は日本側の史料との比較検討を通して、その信憑性の有無を検討していく必要がある。

おわりに

『十六・七世紀イエズス会日本報告集』には、天正16年（1588）の時点で、軍役に関する記載として「天下人とその他の領主が、様々な王国と領地を日本の多くの殿たちに分け与えているが、これらの殿たちは、戦さの時も平時でも一定の数の騎馬、および徒歩の兵を自分で費用を負担して仕えさせる」（下線引用者）、（Ⅲ-7、196～197頁）⁽¹¹⁾と記されている。この記載からは、天下人の秀吉が諸大名に対して軍役として一定の兵力数の供出を課していることが明確に理解できる。この記載が天正16年の時点で見えることは、太閤検地による石高制の確立との関係でとらえることができ、諸大名の石高に照応して軍役（兵力数の供出）を賦課する原則が確立していたと考えられる。その結果、上述のように、天正19年・同20年の時点では、朝鮮出兵（文禄の役）に関して諸大名の軍役人数（兵力数）がそれぞれ明確に規定されていたことがわかる。

『十六・七世紀イエズス会日本報告集』には、上述した諸大名の具体的な軍役人数（兵力数）の

記載以外に、諸大名の石高（或いは俵高）の記載について具体的な数字が出てくる箇所もある（表1参照）。表1における俵高の記載は、天正12～元和4年まで多く見られる一方、石高記載は慶長4～同6年に3箇所見られるのみである。これはイエズス会宣教師が石高表示よりも俵高表示を多用したことを意味している。表1を見るとわかるように、イエズス会宣教師は石高制成立以前から俵高表示を使用していたので、石高制成立後も俵高表示を使用し続けたと考えられる（ただし、上述のように石高表示も若干例ある）。例えば、元和4年の奥州の有力大名についても石高ではなく俵高で表示している（表1参照）。

石高を俵高に換算する場合の換算値については、慶長4～同6年の時点で「米二俵が一石である」（I-3、238頁）と記されているので、1石＝2俵ということになる。現在では1石＝2.5俵として換算するが、これは明治時代に決められた基準であるので、1石＝2俵は当時（慶長4～同6年）の基準値（換算値）として実態に則したものであったのかも知れない。

1石＝2俵として、表1における諸大名などの俵高を石高に換算したものが表3である。表3を見ると俵高を石高に換算した石高と通説の石高は近似するケースが多いので、『十六・七世紀イエズス会日本報告集』における諸大名などの俵高表示は一定の信憑性があることがわかる。

『十六・七世紀イエズス会日本報告集』には、このほか、クルザード（ポルトガルの通貨単位）という単位を石高に換算する場合の換算値について、慶長4～同6年の時点で「毎年三千五百クルザードに相当する五千石⁷²の収入」（I-3、231頁）と記されているので、3500クルザード＝5000石であり、この数値をもとに計算すると1クルザード＝1.4石（計算上、小数点第二位を四捨五入した）ということになる。

『十六・七世紀イエズス会日本報告集』に諸大名の軍役人数（兵力数）や石高（或いは俵高）について記載があるということは、イエズス会宣教師が当該期の日本の状況として、このような点に関心を持ち、イエズス会総長に対して報告していたことを示している。諸大名の軍役人数（兵力数）や石高（或いは俵高）は、本来はイエズス会の布教活動とは直接関係のないことであり、イエズス会宣教師がどのような理由で関心を持ったのかについてはよくわからないが、『十六・七世紀イエズス会日本報告集』を読むと、豊臣政権の時代にキリシタン大名である小西行長や黒田如水⁷³に対する期待が非常に大きかったことがわかる。このことは日本における布教活動を進捗させるうえで政権中枢に近い位置にいる小西行長や黒田如水の存在が必要不可欠であったことを示すものであろう。

その意味では、有力なキリシタン大名をさらに増やす目的で、新たに勧誘すべき有力大名（有力大名は軍役人数〔兵力数〕が多く、石高〔或いは俵高〕も高かった）を事前にリサーチするうえでの基礎調査であった可能性はあるだろう。

或いは、豊臣政権とイエズス会の方針が対立した場合、キリシタン大名たちを統合するとどれくらい軍力が確保できるのか具体的に兵力数などをリサーチしていた可能性も考えられる。このことは、当時のイエズス会が、軍事的意図を背景に大名の軍事利用をおこなおうとした姿が浮かび上がるが、この点の具体的な検討については他日を期したい。

〔註〕

- (1) 本稿で検討対象とした松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』（同朋舎出版）は、Ⅲ期5巻〈天正5～同9年〉（同朋舎出版、1992年）、Ⅲ期6巻〈天正10～同13年〉（同朋舎出版、1991年）、Ⅲ期7巻〈天正13～同16年〉（同朋舎出版、1994年）、Ⅰ期1巻〈天正16～同20年〉（同朋舎出版、1987年）、Ⅰ期2巻〈文禄3～慶長元年〉（同朋舎出版、1987年）、Ⅰ期3巻〈慶長2～同5年〉（同朋舎出版、1988年）、Ⅱ期2巻〈慶長18～元和4年〉（同

朋舎出版、1996年)である。本稿において『十六・七世紀イエズス会日本報告集』から引用した場合は、『十六・七世紀イエズス会日本報告集』の各巻について、例えば、Ⅲ期5巻であれば「Ⅲ-5」のように記載した。また、『十六・七世紀イエズス会日本報告集』では訳者が日本語訳の際に補足した注記が()内に記されているが、本稿において『十六・七世紀イエズス会日本報告集』から文章を引用する場合は、その訳者の注記は省略して引用し、文脈上必要な場合は、筆者(白峰)が(引用者注:)として、独自に意味を補足した。

- (2) 「豊臣大名表」(『角川新版日本史辞典』、角川書店、1996年、1270頁)。
- (3) 前掲「豊臣大名表」(前掲『角川新版日本史辞典』、1269頁)。
- (4) 米山一政編『真田家文書』上巻(長野市、1981年発行、2005年改訂、56号文書)。
- (5) 前掲「豊臣大名表」(前掲『角川新版日本史辞典』、1268頁)。
- (6) 前掲・米山一政編『真田家文書』上巻(56号文書)。
- (7) 前掲「豊臣大名表」(前掲『角川新版日本史辞典』、1271頁)。
- (8) 前掲・米山一政編『真田家文書』上巻(56号文書)。
- (9) 前掲「豊臣大名表」(前掲『角川新版日本史辞典』、1271頁)。
- (10) 貝原益軒編著『黒田家譜』(歴史図書社、1980年、334頁)。
- (11) この記載のあとの箇所には、大名の改易について「天下人が、領主の中の或る一人を追放し、領地を没収する事件が起きれば、彼だけが追放され、すぐ無一文になるだけでなく、その兄弟、親類、家来、および彼に仕え封禄をもらっているその他すべての武士や兵も、共に持っていた土地を失い、追放され、運命に身を委ねなければならない(Ⅲ-7、197頁)と記されている。また、大名の国替えについて「領主について行なわれた移動は、領主が移動ないし領地替えされると、それといっしょに、⁽⁶⁾貴族(引用者注: 大名の重臣クラスという意味か?)、そこの兵も移動ないし替え地させられ、ただ商人、職人、農民だけが残る(Ⅲ-7、197頁)と記されている。イエズス会宣教師による、こうした大名の改易や国替えに関する記載内容は的確にまとめられていると評価できる。
- (12) 黒田如水については「関白殿(引用者注: 秀吉)は彼(引用者注: 黒田如水)に転向を迫らなかつたが、彼について種々の批判をし、キリシタンになったので、関白殿が胸の中で決めていた国は授けなかつたと言つた(下線引用者)、(Ⅲ-7、221頁)、「(前略)汝(引用者注: 黒田如水)がキリシタンであり、伴天連らに愛情を抱いておつたために、予(引用者注: 秀吉)は汝に与えようと最初考えていたより低い身分にしたことを汝は心得ぬか」と(引用者注: 秀吉は言つた)。(下線引用者)、(I-1、217頁)という記載がある。この記載からは、黒田如水がキリシタン大名であつたため、秀吉が大国を与えなかつたことがわかり、逆に言えば、黒田如水がキリシタン大名でなければ、秀吉は当初の考え通りに大国を与えていた、ということになる。このようにイエズス会宣教師がキリシタン大名である黒田如水の領国の動向に関心を寄せていたことは黒田如水に対する期待の表れととらえることができる。

表1 『十六・七世紀イエズス会日本報告集』における軍役人数・石高関係の表

記載年次	西暦	事 項	備 考	典 拠
天正9年	1581	信長→騎馬の武士およそ500名	信長の祭（左義長）	Ⅲ－5、292頁
		柴田勝家→1万の家臣と1万の大夫	信長の別の祭	Ⅲ－5、292頁
		武田信玄（武田勝頼カ）→1万5000の兵	高天神城へ糧食を運ぶ	Ⅲ－5、293頁
		信長→騎馬の士500名	信長の祭（左義長）	Ⅲ－5、338頁
天正11年	1583	前田玄以の俸禄に4000クルザードを上積みした	秀吉が加増した	Ⅲ－6、211頁
天正12年	1584	米1000俵	大野城の貯蔵米（龍造寺隆信）	Ⅲ－6、274頁
天正13年	1585	雑賀攻めの秀吉の軍勢→10万を超えていた	秀吉の雑賀攻め	Ⅲ－7、88頁
		宇喜多秀家（18才〔14才カ〕）→2万の兵	秀吉の雑賀攻め（行軍の先陣）	Ⅲ－7、88頁
		蒲生氏郷→5000の兵	秀吉の雑賀攻め（行軍では先陣の宇喜多秀家の次）	Ⅲ－7、88頁
		蒲生氏郷→伊勢に米25万俵以上の収入 →戦さに行く時は、自分の旗の下に6000余の兵を率いる		Ⅲ－7、99頁
		小寺官兵衛→播磨に米6万俵の収入		Ⅲ－7、99頁
		市橋兵吉→美濃に米2万俵を超える収入		Ⅲ－7、99頁
		牧村長兵衛→近江に米2万5000俵の収入	秀吉の馬廻衆の頭	Ⅲ－7、99頁
		瀬田左馬丞→近江に米1万2000俵以上の収入		Ⅲ－7、99頁
		小西行長→2万俵近い収入		Ⅲ－7、101頁
		龍造寺隆信→2万5000の兵	沖田礮の戦い（天正12年）	Ⅲ－7、112頁
天正16年	1588	小西行長→32万俵以上の収入	肥後半国の領主になる	I－1、26頁
天正17年	1589	高山右近→2万俵の禄 →戦役がおこっても秀吉に仕える義務（＝軍役）はない		I－1、119頁
天正18年	1590	高山右近→年4万俵の封禄 →責務（＝軍役）を負っていない		I－1、181頁
天正19年・ 同20年	1591・ 1592	有馬晴信→2000の兵 大村殿（大村喜前）→1000の兵 小西行長→1万5000の戦士＋水夫、糧秣商、 その他必需品運搬要員 大友義統→6000の兵 黒田長政→4000の兵。大友義統の6000と 合計して1万の兵 →水夫や他の運搬要員は除外して 1万 龍造寺殿（龍造寺高房） →8000の兵。加藤清正への援軍。 島津侯（島津義弘） →8000の兵。毛利吉成への援軍。 小西行長が総大将 名簿によってわかった総数は30万で、その 中の将兵は20万 ※将兵以外は10万ということになる	朝鮮出兵	I－1、275頁

記載年次	西暦	事 項	備 考	典 拠
天正19年・ 同20年	1591・ 1592	かの4名の大将（小西行長・黒田長政・加藤清正、毛利吉成）に率いられた将兵を除いても総勢20万はいた	朝鮮出兵	I-1、279頁
文禄4年	1595	20万の兵力	朝鮮出兵	I-2、93頁
慶長元年	1596	5万名の兵士が飢饉や種々の疫病によって死んだ	朝鮮出兵	I-2、184頁
		この戦争で戦死した5万の将兵	朝鮮出兵	I-2、324頁
慶長4年	1599	家康は3万の軍勢を自分の諸国から招集した	家康への詰問の時の対応	I-3、122頁
		石田三成→6000の武装した軍勢に守られながら夜を過ごしていた	石田三成の失脚の時の対応	I-3、123頁
慶長4～ 同6年	1599～ 1601	明石掃部→毎年5000石（3500クルザードに相当）の収入		I-3、231頁
		豊臣秀頼から織田秀信に対して米2000石ないし3000石がもたらされた（米2俵が1石である）	織田秀信が豊臣秀頼に味方した時の対応（関ヶ原の戦い）	I-3、238頁
		豊臣秀頼が織田秀信に対して4万クルザードに相当する美濃と尾張のすべての扶持を与えた	織田秀信が豊臣秀頼に味方した時の対応（関ヶ原の戦い）	I-3、238頁
		毛利秀元→およそ1万2000人くらいが城塞を修復し、出陣の準備をしていた	関ヶ原の戦い	I-3、240頁
		伏見城→2000名の兵（家康側の兵力）	関ヶ原の戦い	I-3、242頁
		大坂城に集結→わずかの間に10万を超えた	関ヶ原の戦い	I-3、248頁
		尾張の城（清須城）→約3万の兵が集結した	関ヶ原の戦い	I-3、250頁
		美濃国→奉行の石田三成が6000ないし7000の兵を率いて、尾張に攻め入ろうと、今か今かと待機していた	関ヶ原の戦い	I-3、250頁
		治部少輔（石田三成）の城（大垣城）→薩摩の国主（島津義弘）と小西行長が若干の兵を率いて来着していた	関ヶ原の戦い	I-3、251頁
		黒田官兵衛→8000以上の兵とともに、敵側についていた豊後国へ出陣した	石垣原合戦	I-3、251頁
		大友義統→4000近い兵を率いて豊後に入り（後略）	石垣原合戦	I-3、252頁
		諸奉行→その軍勢を可能な限り美濃国に集結させようとした。その結果、8万の兵を集めることができた。	関ヶ原の戦い	I-3、253頁
		家康→味方の軍勢と合流しておよそ5万の軍団を結成し、翌日の戦闘開始を命じた	関ヶ原の戦い	I-3、253頁
		毛利輝元→その諸領主から来た兵すべて4万	関ヶ原の戦い	I-3、254頁
		小西行長→朝鮮（における）行軍と戦役→20万に近い軍勢の最高（指揮官）	朝鮮出兵	I-3、277頁

記載年次	西暦	事 項	備 考	典 拠
慶長5年	1600	(尾張の)城(=清須城)→3万の軍勢 →岐阜城へ突入	関ヶ原の戦い	I-3、307頁
		石田三成→6000~7000の軍勢 →美濃国に大勢を待機 →尾張のその地域へ侵入できるようにしていた	関ヶ原の戦い	I-3、307頁
		黒田官兵衛→豊前国に8000の軍勢を有した →豊後国の方へ率いて行った	石垣原合戦	I-3、308頁
		大友義統→4000の軍勢を率いて豊後へ到着	石垣原合戦	I-3、308頁
		奉行たち→軍勢を美濃国へ集結させ、8万人 が集結した	関ヶ原の戦い	I-3、309頁
		3万にも満たぬ敵の軍勢(=家康方の軍勢)	関ヶ原の戦い	I-3、309頁
		家康 <small>(テラ)</small> →美濃(尾張カ)にいた軍勢と合流し、 そのうえ5万の軍勢を擁するようになった	関ヶ原の戦い	I-3、310頁
		毛利輝元→己が諸領国から4万の軍勢をも 召集していた	関ヶ原の戦い	I-3、311頁
慶長18年	1613	伏見→4人の隊長の4つの旗のもとに6000 の兵からなる守備隊がいて、市(まち) (=伏見)を守っている	伏見の守備隊	II-2、89頁
慶長19年	1614	伏見の要塞に置いていた自分(家康)の4人 の隊長のうち一人→山口直友に50人の 兵士を引き連れてできるだけ早く長崎に 急いで行くように命じた	伏見の守備隊	II-2、186頁
		山口直友→十分な数の兵士の小隊を率いて 到着した	家康による山口直友の長崎派遣	II-2、187頁
元和4年	1618	奥州にいる7人の有力な領主 筆頭は、伊達政宗 →毎年の収入は米120万俵 第二の領主、蒲生忠郷 →伊達政宗と同じくらい多額の年収 第三の領主、上杉景勝→70万俵 第四の領主、南部利直→30万600俵 第五の領主、鳥居忠政カ→24万俵 第六の領主、相馬利胤 →この領主の年収についてはよく判ら ない 第七の領主、津軽信枚→8万俵 出羽国は、2人の領主によって分割されて いる。 佐竹義宣→36万俵 最上義俊→48万俵	東北の諸大名の石高	II-2、404頁

※表1における典拠の各略称については、本稿の註(1)を参照。

表2 朝鮮出兵（文禄の役）における諸将の動員人数（『十六・七世紀イエズス会日本報告集』）

所属番隊	部将名	城地	石高	兵力数A	兵力数B	兵力数Aの軍役基準 (1万石につき何人)
1番隊	有馬 晴信	肥前日野江	4万石	2000人	2000人	500人
1番隊	大村 喜前	肥前大村	2万7000石	1000人	1000人	370人
1番隊	小西 行長	肥後宇土	20万石	1万5000人	7000人	750人
3番隊	大友 義統	豊後府内	37万8000石	6000人	6000人	159人
3番隊	黒田 長政	豊前中津	18万石	4000人	5000人	222人
2番隊	龍造寺高房	肥前佐賀	30万9000石	8000人	1万2000人	259人
4番隊	島津 義弘	大隅栗野	61万9000石	8000人	1万人	129人

【出典】

松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第1期第1巻（同朋舎出版、1987年、275頁）

【凡例】

兵力数A…『十六・七世紀イエズス会日本報告集』に記載された諸将の兵力数。

兵力数B…中野等『文禄・慶長の役』（吉川弘文館、2008年、33頁）の表1（三月十三日付「陣立書」の軍団構成）に記載された諸将の兵力数。

所属番隊…前掲・中野等『文禄・慶長の役』の表1をもとに記載した。

城地…前掲・中野等『文禄・慶長の役』の表1をもとに記載した。ただし、前掲・中野等『文禄・慶長の役』の表1では、龍造寺高房ではなく鍋島直茂としている。

石高…『角川新版日本史辞典』（角川書店、1996年、1271～1272頁）の「豊臣大名表」をもとに記載した。

兵力数Aの軍役基準…各部将の石高と兵力数Aの関係をもとに、1万石につき何人の軍役基準であるのかについて計算した（この場合、計算上、無役高は考慮しない）。計算の結果、割り切れない場合は、小数点第一位を四捨五入した。

※所属番隊、城地、石高、兵力数B、兵力数Aの軍役基準については、表2の作成にあたり補足した。

表3 諸大名などの俵高を石高に換算した表（『十六・七世紀イエズス会日本報告集』）

名前	俵高	石高に換算	通説の石高 (注1)	記載年次	西暦
蒲生 氏郷	米25万俵以上の収入（伊勢）	12万5000石	12万石	天正13年	1585
小寺官兵衛	米6万俵の収入（播磨）	3万石		天正13年	1585
市橋 兵吉	米2万俵を超える収入（美濃）	1万石		天正13年	1585
牧村長兵衛	米2万5000俵の収入（近江）	1万2500石		天正13年	1585
瀬田左馬丞	米1万2000俵以上の収入（近江）	6000石		天正13年	1585
小西 行長	2万俵近い収入	1万石		天正13年	1585
小西 行長	32万俵以上の収入（肥後半国）	16万石	14万6000石	天正16年	1588
高山 右近	2万俵の禄	1万石		天正17年	1589
高山 右近	年4万俵の封禄	2万石		天正18年	1590
明石 掃部	毎年5000石（3500クルザードに相当） の収入（注2）	5000石		慶長4～同6年	1599～1601
伊達 政宗	毎年の収入は米120万俵（注3）	60万石	61万5000石	元和4年	1618
蒲生 忠郷	伊達政宗と同じくらい多額の年収	60万石	60万石	元和4年	1618
上杉 景勝	70万俵（注4）	35万石	30万石	元和4年	1618
南部 利直	30万600俵	15万300石	10万石	元和4年	1618
鳥居忠政カ	24万俵（注5）	12万石	12万石	元和4年	1618
相馬 利胤	年収はよくわからない（注6）	不明	6万石	元和4年	1618
津軽 信牧	8万俵	4万石	4万7000石	元和4年	1618
佐竹 義宣	36万俵	18万石	20万5800石	元和4年	1618
最上 義俊	48万俵	24万石	57万石	元和4年	1618

(注1) 表3における「通説の石高」については『角川新版日本史辞典』（角川書店、1996年、1269、1272頁、1293～1296頁）の「豊臣大名表」、「近世大名配置表」をもとに記載した。

(注2) 明石掃部については俵高ではなく、石高で記載されている。

(注3) 「伊達、或いは伊達政宗」と記されていて、「ダテ」以外に「イダテ」という読み方も当時存在したことがわかる。

(注4) 上杉景勝は「奥州にいる七人の有力な領主」の一人として記されているが、上杉景勝は米沢城主（出羽）であるので、陸奥国（奥州）ではなく出羽国の領主である。

(注5) 訳者（鳥居正雄氏訳）は「（戸沢政盛、鳥居忠政、酒井忠勝か）」と記しているが、戸沢政盛と酒井忠勝は元和8年入封であり、この記載は元和4年の時点のことを記しているので、戸沢政盛と酒井忠勝は該当しない。

(注6) 「ソマイダゼン」と記されていて、具体的な人物比定をしていないが、これは「相馬大膳」という意味であると考えられるので、相馬利胤（相馬大膳）に比定できる。

※それぞれの項目の史料典拠（『十六・七世紀イエズス会日本報告集』）の巻数、頁数については表1を参照。